

氏名	高橋 さやか
ヨミガナ	タカハシ サカ
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博音第235号
学位授与年月日	平成26年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 フォーレ声楽曲において歌手にもたらされる身体感覚－《イヴの歌》におけるリズム・オスティナートと同音反復を中心にして－ 〈演奏〉 Gabriel Fauré Le jardin clos Op.106 (Exaucement二長調、Quand tu plonges tes yeux dans mes yeuxト長調、La Messagèreイ長調、Je me poserai sur ton cœurへ長調、Dans la nymphée変ホ長調、Dans la pénombre変ト長調、Il m' est cher, Amour…ト長調、Inscription sur le sable 嬰へ短調)、Les Roses d' Ispah

論文等審査委員

(主査)	東京藝術大学	教授	(音楽学部)	吉田 浩之
(副査)	東京藝術大学	教授	(音楽学部)	寺谷 千枝子
(副査)	東京藝術大学	教授	(音楽学部)	佐々木 典子
(副査)	東京藝術大学	教授	(音楽学部)	片山 千佳子

(論文内容の要旨)

フランス歌曲の世界で、代表的な作曲家として知られるガブリエル・フォーレGabriel Fauré(1845-1924)。その音楽の魅力は、一般には、崇高でありながら控えめで上品な音楽性と思われがちだが、その魅力の奥にもっと核心的な特異性が隠されている。聴衆の視点ではなく歌い手の視点をもって、演奏経験を踏まえて、フォーレの音楽性に迫る時、この特異性を見出すことができる。それは、フォーレ音楽を演奏する者が味わうことのできる、独特な身体感覚である。

フォーレの声楽曲を演奏している際に、他の作曲家の作品を演奏している時よりも、自分が何かを表現しようという能動的なエネルギーが抑えられ、その分、ただ音と歌詞が体内へと深く染み込んでいく受動的なエネルギーが強く感じられ、体中がその音楽に包まれて、その音楽にただ浴すような感覚が発生する。

本論文では、演奏者の神経ではなく魂へと働きかけるとでもいうしかないような、この特異な身体感覚について述べ、それをもたらすフォーレ音楽の内側をひも解き、この特異性がどのように生まれ、それを使って演奏者がどのような表現を現出できるのかを追及する。

この身体感覚が最も顕著に感じられる、後期作品の傑作《イヴの歌La Chanson d' Ève》(1906-1910) Op. 95を中心に論を展開し、《イヴの歌》において特別な身体感覚を演奏者に引き起こすのに明らかに影響を及ぼしていると考えられる「リズム・オスティナート」と「同音反復」という二点の手法に焦点を当てることで、この特異性に迫る。

リズム・オスティナートとは、伴奏パートにおいて同じ音型が絶えず繰り返されるリズム・パターンを指す。この技法は、安心感と緊張感を生み出し、結果、歌い手は心を解放させることとなり、作品世界へ引き付けられ、声楽パートの歌詞と旋律に対する集中力を高めるのを促す働きを持っている。このため、歌い手は、頭や神経ではなく、心で声楽パートの旋律と歌詞を感じることができるようになる。

同音反復とは、声楽パートにおいて、二音以上同じ音程が連続して置かれることを指す。この手法によって、演奏者には音程変化を追うという動の要素が排除されるため、その精神が静められ、音と歌詞を味わいやすくなる。また、声楽パートの旋律の動きが抑えられることで、声楽パートを形成している旋律と歌詞のうち、歌詞が独立してくっきりと際立ち、語りの要素が強まる。

章の構成は以下の通りである。第一章では、フォーレ声楽曲の変遷を大まかに辿ることで、フォーレの作曲スタイルを概観する。フォーレの音楽は、その生涯の中で、様々な詩人との出会いによって変化し、内面的なものに重きを置く傾向を強めていった。第二章では、「リズム・オスティナート」という手法が、フォーレ声楽曲の変遷の中でどのように現れ、《イヴの歌》での開花へと至ったのかを探る。この手法によって、フォーレ音楽に、演奏者を作品世界へと引き込む、霊妙と言えるほど強い誘引力がもたらされることを詳述する。第三章で、フォーレ声楽曲における「同音反復」を分析し、後期に向かって驚異的に増加するこの技法の使用の変遷を辿る。また、この技法が、演奏者と詩の心を近づけ、生まれる表現を内的なものにするという点を論述する。そして、第四章では、この二つを主とするさまざまな効果をふんだんに盛り込んだ《イヴの歌》を分析し、それらの効果を生かすテクニックを提示することで、内面的かつ生命力のある最も自然な表現を可能にしてくれるフォーレ音楽の本質を捉える。

そのメカニズムは以下の通りである。リズム・オスティナートのもたらす安定感が作品を支える柱となり、演奏者が安心して精神を解放できる穏やかさを作り出す。そして同音反復の多用によって、演奏者が心の深い場所で詩の主人公の言葉を感じ、主人公自身に成り代わることすら可能となる。その結果、フォーレ音楽は、身体感覚を揺さぶるような人間の根源的なもの、言葉に表すことのできない命や魂に近い場所で生まれるものを、演奏者に伝えてくれる。演奏者がこのことを理解し納得してフォーレ音楽に向かう時、作為的なことをせずとも、音楽と詩に寄り添い、音楽と詩の内側にあるものを自然に聴衆に届けることができるのである。

フォーレ音楽がこのような感覚を引き起こす特徴は、後期作品になればなるほどより一層強まる傾向にあり、《イヴの歌》で一つの頂点に達したと考えられる。しかし、フォーレの後期作品の演奏の機会は、前期・中期作品よりも圧倒的に少なく、フォーレ音楽の引き起こすこの特別な身体感覚を体感している演奏者がまだまだ少ないというのが現状である。本研究により、演奏者、聴き手共に、フォーレの後期作品に対する理解を深め、フォーレ音楽の新たな魅力を見出し、演奏意義をさらに深めることを期待する。

(総合審査結果の要旨)

平成25年11月13日に第1ホールに於いて、高橋さやかさんの博士後期課程学位審査演奏会が行われた。ガブリエル・フォーレの後期声楽作品である、《閉ざされた庭》Op. 106と《イヴの歌》Op. 95を中心に全てフォーレの曲による構成であった。音域的には少し低めのプログラムとなったが、すべての音に充実した響きを持った極めて自然で柔軟な発声と表現、加えて終始美しいフランス語の流れとともに完成度が高く、その奥深い世界を十分に表現していた。時折、声質のトレモロにより不安定な音色が見受けられたとの指摘もあったが、ピアノシモ（弱音）の響きが特に素晴らしく、バランスの取れた見事な演奏であったと、非常に高い評価であった。

また、この演奏会はフランス歌曲、特にフォーレ歌曲演奏においての世界的な第一人者であるダルトン・ボールドウィン氏をピアニストに迎えて行われ、その大きな支えのもとにリハーサルから本番までを通して申請者自身の受けた影響は多大なものとなったであろう。氏に助けられ、極めて繊細で柔らかく、しかも自由に伸び伸びとした温かい雰囲気での演奏会となった。

続けて論文審査会が行われた。「フォーレ声楽曲において歌手にもたらされる身体感覚」という題目で、フォーレ声楽曲を演奏するものにもたらされる、音と歌詞が体内へと染み込んでいくような受動的な感覚を解明するために、その特徴が顕著に感じられる《イヴの歌》における「リズム・オスティナート」と「同音反復」という手法に焦点を当て、この特異性に迫る、というものであった。申請者によれば、この2つの要素は、歌い手に安定感と同時に緊張感を与え、声楽パートの歌詞と旋律に対する集中力を高めるファクターとして機能する。同音反復については、全歌曲におけるその出現頻度を曲ごとにパーセントによって数値化することも試みている。また、こうした分析を通じて申請者は、フォーレの後期の歌曲、特に《イヴの歌》において、それらが実際の演奏において具体的に例証するのに成功しており、フォーレ歌曲全体に渡って申請者が積み重ねた演奏体験を、歌詞と楽曲の分析によって具体的に言語化するという一貫した論述姿勢は、と

もすると主観的な印象論に陥りがちなこのテーマを読み手にとって「追認可能な論述」として成り立たせていると、高く評価された。

ただし、第3章までは成功していたこの危うい均衡が、肝心の《イヴの歌》に関する第4章で崩れてしまったのは残念であり、フォーレ音楽への敬意の主観的表明と演奏時の留意事項とが、分析的記述に混入してしまったことが原因であるとの指摘もあった。

しかしながら、全体としては実技系博士論文にふさわしく、終始一貫して演奏家としての立場を崩さず、その論文の主旨が十分に生かされた秀逸な演奏とともに、博士の学位を授与するにふさわしい成果を挙げたものと認め、審査員全員一致で合格とする。